横浜歌人会 会 118*報

目次

- ●特集1>> 観月会
- * 02 報告 … 朝井恭子/宮下俊博/土屋美代子/髙橋律子
- * 04 詠草
- ●特集2>> 新春歌会
- * 06 報告 … 河北笑子/津波古勝子/後藤恵市
- * 08 詠草
- * 05 会員作品

小川俊子/小野政男/関口満津子/田谷幸子 柴田昌子/髙橋庚子/鈴木和子/大久保晴雄

- * 09 会員著書紹介 … 野一色容子第三歌集『自堕落補陀落』
- * 10 会員作品

長野道子/中込カヨ子/清水正子/井澤幸恵/小南紀子 柴原明美/津金規雄/川井怜子/鶴見典子/尾崎知子/佐波洋子

* 11 編集後記

特集1 観月会

— 二年ぶりの桜木町

2年ぶりの東天紅横浜桜木町ワシントンホテル店での観月 ました。

お月様に会えることを楽しみにしながら、当日を待ち

今年 暦ではこの日は「満月」。会場は例年通りのワ (平成二十九年)の観月歌会は十月八日に行わ

ロケーションだ。 や沖待ちのタンカーも見え「よこはま」の気分満点の だった。二十四階の窓からは湾内を行き来するボート シントンホテルの二十四階「東天紅」である。 当日は暦通り、満月が期待できる秋晴れの美しい日

に入れるようにとの思いから生まれたのである。 のを避け、初めての出席メンバーも疎外感なく輪の中 められた。同じ結社の仲間や顔見知り同志が寄り合う めにトランプのカードを一枚選ぶ。このトランプ方式 は今は亡き角宮悦子さんの発案によって五年前から始 今回の参加者は三十一名。 会場の入口で席決めのた

[日時] 2017年10月8日(日)

会:14:00~16:45 懇親会:17:00~19:00

東天紅 横浜桜木町ワシントンホテル店 (横浜市中区)

する。 カードによって導かれた会員が着席しグループを構成 午後二時に観月会開始。 歌会の総司会は真鍋正男さん。目配り心配りよく歌 会場内の四つの円卓には

が問題点を洗い出し的確な批評をするのもこの歌会の や曖昧さを率直に指摘し、補佐的役割をする第二評者

つながりを表現」が印象に残った。短歌における、伝

会を進行させる。席順毎の第一批評者が表現の不明さ

●観月会記 朝井恭子

詠草参加三十六名、歌会参加三十一名であった。出席 れる絶景のスポットである。 モワールド、日本丸、汽車道などや横浜の海の眺めら 真鍋正男副代表委員の挨拶・司会で歌会が始まる。

年の観月会が開かれた。みなとみらいのビル群、

コス

シントンホテル二十四階の「東天紅」に会場を戻し今

月齢十七・九日の十月八日、二年振りに桜木町のワ

に月、 る男」の「遠く・近く・日常生活、 る、の使い分けによる時空の静けさの中の動き」、「受 亡きひとがはなしゐるかのごとく」の「をり、と、ゐ ので忌憚のない意見が出て、大いに学ぶところがあっ めた。超結社の集まりで、コンテスト形式をとらない、 話題となった表現について作者の思いを聞き鑑賞を深 て」の「下句の表現による上句のイメージ化」、「空 け容れて賑やかになる一室に白い月かげ編むようにし た。個人的には、「月光がスチール椅子を濡らしをり 火・マグマ」「風道海割れ」「不条理」「スチール椅子」 を評者なりの視点でさらに深めていった。その後、「噴 者が一首ずつ順番に評したあと、第二評者が五~七首 「オリーブの苗木」 「なづきを冷やす」「コンビニのくじ」「繊月」など 「ユダの夜半の手」「受け容れて」「満月といふ力」 海には海月、コンビニのくじで当たりを引きた 「岩屋・形なきもの」「窓あきて_ の存在に、ツキ、

歌会なのに参加者が少ないのは謎である。 魅力である。これ程刺激的で学ぶべきものが多い観月 窓から月を眺めながら我家で「一杯」よりも、

歌会で出遭う一首の方がより刺激的であり深い詩情が

月愛づる歌仲間 宮下俊博

た。 達ではなく詩としての言葉の多様さをあらためて思っ

薄闇の濃くなっていくなか、田村元氏の司会のもと 薄闇の濃くなっていくなか、田村元氏の司会のもと 薄闇の濃くなっていくなか、田村元氏の司会のもと 悪の工夫にも拘わらず卓の人数が不揃いとなり残念 が月を覗くことができた。人数を考え、円卓の数、座 い月を覗くことができた。人数を考え、円卓の数、座 に三年連続、真鍋氏の用意した望遠カメラにまだ丸 出、三年連続、真鍋氏の用意した望遠カメラにまだ丸 は、三年連続、真鍋氏の用意した望遠カメラにまだ丸 がったが、「三十分延長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分延長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分延長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分延長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分延長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分が長のなか月の出で浮かぶ笑顔の だったが、「三十分が、田村元氏の司会のもと

● 港の月を楽しむ――土屋 美代子

の挨拶で会は始る。この時、氏はポロシャツで挨拶 名の会員が参加した。定刻に副代表委員の真鍋正男氏 当日の歌会への出席者は三十一名、 望出来る観月会にふさわしい場所だ。港の月を楽しみ 催された。ホテルの二十四階にある会場は横浜港を一 て遠慮のない充実した歌会であった。 である。話題作については作者が自解を述べるなどし 講評をする。いつもの横浜歌人会方式とも言える歌会 た。七首終るごとに、事前に指名された方がまとめの 三十一首について座席の順に一人一首ずつ意見を述べ は午後二時よりコーヒー・ブレイクを挟んで約三時間 である。意外な事でお人柄を伺うことができた。歌会 をすることに恐縮されていた。上着をはおらないのは にして参加した。今回の出詠は三七首である。しかし、 一十キロ近くある望遠鏡を担いで来たからということ 恒例の観月会が十月八日(日)桜木町の東天紅で開 懇親会には二十一

出は七時十五分ということがわかり開催時間を急遽、五時から予定通り懇親会。ところが、この夜の月の

鏡がでんと据えられた。この日、 唱された通り、ここでは〈かんげつえ〉ということで 雰囲気をご覧になり「いいなあ」と開口一番つぶやか もの親しみのある表情で来られて、ひとわたり会場の 所用のために懇親会が始まってから出席された。いつ の出を期待する参加者の気持ちを代表して窓際に望遠 延長された。これで港の月をたっぷり鑑賞出来る。月 短歌への思いをあつく話しながら楽しく食事をした。 た月の頭が見えて会はいよいよ盛り上がり、 かしく偲んだことである。六時ころ望遠鏡に赤み帯び 落ち着いた。思いがけないところで、角宮悦子氏を懐 んげつえ〉の声がした。すると生前の角宮悦子氏の提 談笑する。やがて今夜は〈かんげつかい〉それとも〈か れたのが印象的でした。自己紹介などをして和やかに 吉野裕之代表委員は お互いの



歌会では、活発に意見交換がなされました。

空にオレンジ色の月を鑑賞した。歓談する間も代わるがわる望遠鏡を覗き薄曇りの港の

の観月会は終った。
閉会した。中空の月を惜しみながら盛会のうちに今年の気軽なよさの現れたいい会でした」との、ご挨拶での気軽なよさの現れたいい会でした」との、ご挨拶で

●十六夜の月――髙橋律子

ワシントンホテル、東天紅にて行われた。十月八日、十六夜の月を鑑賞する観月会が桜木町の

様々の視点からの歌に、私は驚き、感嘆した。歌会は三十六名中欠席五名。月を詠った歌だが、

活発に交わしたりした。
一八首ごとにそれぞれ区切って評を頂いたり、意見を生、鹿取未放先生、山本登志枝先生に、出詠歌を七首、の会は、高尾文子先生、田村元先生、野一色容子先

マに沿うことをまず考えようと思った。考えず、書道のことを詠んで提出してしまった。テーいに、自分の歌の未熟さを痛感した。月を詠むことをいに、自分の歌の未熟さを痛感した。月を詠むことを初めて観月会に出席し、このような結社を越えた集

懇親会が続いて行われ、歌へのざっくばらんな感想をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をお聞きすることで、まわりの方々の歌に対する真摯をおいた。

長く、そして時に厳しく、続けていきたい。に響くものがあった。まだ入会間もないが、楽しく、を超えた歌会は、作風も様々で学ぶところが多く、心を超えた歌会は、作風も様々で学ぶところが多く、心法)、書道の会などいろいろな場に出席するが、結社法)、書道の会などいろいろな場に出席するが、結社法)、

詠草

- 入院は小さな噴火わたくしの内なるマグマ凍てつか 中川宏子
- ・亡き夫の古き葉書の文字褪せて「ハバナの月は若い」 河北笑子
- 思ふやうに筆が動かぬ倣書なり続けることが才だと 髙橋律子
- 白じらと月冴えわたり神さびぬ辺野古風道海割れよ 津波古勝子
- まろまろと月昇りたり窓の辺に折鶴ひとつ影を濃く 杉下幹雄
- 草なかに南瓜の花はあざやかに黄の色見する朝の光 塚田キヌエ
- 鳩の巣とり払はれし鉄塔の夕づくる空に半月浮けり 土屋美代子
- 立佞武多しづしづ街角回るときおまけのやうに十六 野一色容子

海近き運河に映る昼月の白き影ゆらし細波のたつ

- もうすぐに秋が来るよと告ぐるがに酷暑の真昼つく 中村規子 朝井恭子
- 好意以上に育たなかった横浜の人の面影 人麻呂のかたぶく月のやさしさよ封する手紙に後悔 月のうし 苅谷君代
- 新田由美子
- 満月を横切る銀の翼あり月は一瞬まばたきをせり

千田政子

やす

る

- リュックにも杖にも鈴を鳴らす人月夜の道にすれ違 半澤敏子
- 思うや 美ら海の辺野古も照らす満月よ この不条理を何と 田之口久司
- 朝顔の蔓ベランダへ上り詰め天辺に二花咲かせてゐ 勤
- 月光がスチール椅子を濡らしをり亡きひとがはなし ゐるかのごとく 小島熱子
- だ月の光は イエス売つて銀得しユダの夜半の手を照らしたはず 高尾文子
- 受け容れて賑やかになる一室に白い月かげ編むよう
- 五番街に方位感なきわが頭上宵の半月なつかしく見 にして 嵯峨直樹
- 今宵見る満月赤し逝きし人遺されし者の未練かあわ 竹内芳恵

る

- 吹く風に薄雲しだいにはらはれて満月といふ力の見 原 昌子
- つくよざしとのも明るく箱根路の湖上の花火しまし たけなは 山本登志枝 伊藤宏見
- ちちははの在さぬ地上オリーブの苗木のそばで月を 観てゐる 田代弥生
- 桜が丘、月見台すぎ桜台小学校より声はずみくる 長谷川静枝
- 吾が里を離れて早幾年ぞさやかに光る月影見たき 瞑想の岩屋に月の光差し形なきものをおぼろに照ら 深志聖子
- 窓あきて朝の空気の流るれば部屋の隈へと月影消ゆ 五年ものの月の雫と名づけたる梅酒一杯なづきを冷 藤田絹子 宮下俊博 下田聰子 [写真] > 真鍋正男:P4

- 空に月、海には海月、コンビニのくじで当たりを引 きたる男
- 雨あとの月のひかりに薄衣の雲をし見れば亡妻の偲 謙
- ・そば畑にそばの花咲きそよぐ宵十二夜の月やうやく
- 蟬はここに果てむとせしか石段のさきにかするる昼 工藤こずゑ
- 月の見ゆ 三枝むつみ
- みなとみらいの空き缶のあひに揺れてゐる一羽のか もめとあをき満月 鹿取未放
- 繊月は眼凝らせど見つからず屈み込みたりパノラマ 秋雨のさ止みし雲のすき間から包帯の月かすれて照 真鍋正男
- 夕日浴びうさぎ飛び出す薄月にひと逝ったことおも りぬ 後藤恵市

えず 一人

髙橋みずほ



お月様。

一会員作品

関口満津子

家族らと移り移りて六十年今独り住む老人ホーム

思ひ見ざりき 起き出でてコーヒーを飲み朝餉待つかかる生活を

ムの朝餉 お早うとハイタッチする幾人か独りではないホー

車も ふはふはの新雪を踏み轢き崩しひたすら進む人も

たり 太陽と月と地球は束の間を相寄り静かに別れ行き

おやみなく時は過ぎゆき瓶に挿す朱き椿がはつか

に皺む

●田谷幸子

小川俊子

胸に差す春のひかりを恋ひにつつ椿咲く道ひとり 青空に直線を引き飛行機一機右から左へすぎて行

きたり

し歩む

風いまだ冷たき朝を匂ひくる沈丁花の香は未知へ

の期待

ろ安けし

初咲きの水仙ちちはは亡き夫に選びて今朝のここ

お出かけと言へば帽子とカバン持ち靴はきて待つ

曽孫の「花」は

大雪と聞きて外出をひかへしに晴天となり心が曇

る

●鈴木和子

雪とけて樹齢五十年の桜木の細枝一せいに輝きは

じむ

カサブランカの香る美容院を出でしとき強風豪雨 にたちまち捕はる

永遠にあれ 大戦の生き残り世代といへるわれ 横浜の煌きの

●小野政男

デイサービス家から拉致されてゆく如し迎えの人

みな青き服着る

九十一歳しょぼくれながら生きてるぜ毎週日曜日

「笑点」観つつ

街なかに「探偵」の文字でかでかと看板の美女雨

でもにこにこ

●柴田昌子

飛ばされし帽子のごとく白き鳥冬夕焼けの湖へ消

えゆく

ポケットの鍵の鈴の音鳴らしつつおもかげうすれ し絹の道ゆく

からみあう樹根に足をとられつつ観音堂へたどり

つきたり

•大久保晴雄

幼子ら砂場にあそぶ母たちはスマホをいじる温き

冬の日

ではまたな 今日も割り勘笑ひあふ埋まらぬ溝に

触るるを避けて

寄り合ひて間あひ計りて猫座る声は出ださず暗き

空地に

特集2 新春歌会

— 今年も馬車道十番館で

[日時] 2018年1月27日(土)

> 会:13:00~13:40 会:14:00~16:40 懇親会:17:00~18 : 50

馬車道十番館(横浜市中区)

今年も、馬車道十番館の素敵な空間と、お料理とお酒を 楽しみました。

新春歌会に参加して--河北笑子

があるもので、内容の濃い批評が錯綜して活発な歌会 となった。しかし、少数の歌会はそれなりのメリット せいか、出詠者三十名、 になった歌に絞って紹介したい。 となった。紙面の都合もあり、その交錯した評の対象 今年の新年歌会は数日前の雪が消え残って寒かった 欠席者三名で二十七名の歌会

金の鈴の音銀の鈴の音はじまりは小さな音をそっと

駅の待合室?では「銀の鈴」は?いや何かのコンサー トの音合わせ?(正解は、 この歌はいろいろな解釈が出た。「金の鈴」は東京 「破魔矢の鈴」を詠んだ歌)

右の目がまだみつからないどうしよう夕暮れのなか みんな見てゐる

後者の解釈が多かったようだ。(正解は夢の中で本当 歌」いや「コンタクトレンズを落として探している歌_ この歌の評は大方二つに分かれた。「何かの暗喩の

に目をなくした歌

現が欲しい、という声があった。 これらの解釈のもつれはもう少し読者を誘導する表

た三時間であった が正しく理解出来るように言葉の斡旋に努める。勝手 する反論は「自身が表現しようとするものを、享受者 ついて、或る人は「一旦歌として表現したら、享受す があった。全く交わることのない異なる歌論が交錯し に全く違う解釈をされてよしとはしない」という発言 る側がどんな解釈しようと自由だ」という。それに対 表現しようとしたことが享受者に理解されない歌に

「ハッ」として「ホッ」とした新春歌会――津波古勝子

お顔の見えない方々の安否が気遣われた一月二十七 歌会は、参加者の少なさに多少の寂寥感を覚ながらも 連日押し寄せる寒波を振り払うように参上した新春 馬車道十番館にて催された。

批評。第二評者は桜井健司、嵯峨直樹、 髙橋みずほ、山本登志枝の諸氏 歌評会は多人数より程々の方が実のある作品評が適 詠草は三十の中四名は欠席により二十六首を席順に 塚田キヌエ、

ならない。
かいとする。改めて考えるまでもなく当然の辞意に他中でも「歌評は答えを出すものではない」との声に中でも「歌評は答えを出すものではない」との声に

おんな見てゐる 右の目がまだみつからないどうしよう夕暮れのなか

の才量が問われよう。
の才量が問われよう。
おった。呈示された作品に如何に付き合うか、読み手はないかとの事例も話題になったが作者は「NO」ではないかとの事例も話題になったが作者は「NO」で

中から汲み上げる詩情が肝心を識りつつも時に独善的

今日的社会情況をイメージさせる歌に注目。

中にて

人類が立っているよう議事堂が立っているよう雪の



馬車道十番館の歴史や建物などについて 総支配人・浅羽行郎さんから お話をうかがいました。

せん」と即答。 「デモに…」「いや政治は詠いまたんです」との由。「デモに…」「いや政治は詠いまたんです」との由。「デモに…」「いや政治は詠いまになってしまう。「人類」とシンボリックに詠い上げ

を噛み締めた。 「何を詠うか」「何を詠わないか」近藤芳美の言葉

特に心に残る歌を三首

- の谷戸山雨戸鎖す手をしばし止む残照にもみぢ明りする師走
- **鳩いくは椎の葉群に影おとしかがやきとなる空のま**
- 街いかづちを包んで雲は空に張るくろがね色の川崎の

寒波の新年会――後藤恵市

風景の

高橋みずほ、山本登志枝の諸氏。
二十七日に、例年通り馬車道十番館にて開催された。
二十七日に、例年通り馬車道十番館にて開催された。
この参
いお、第二評者は桜井健司、嵯峨直樹、塚田キヌエ、
なお、第二評者は桜井健司、嵯峨直樹、塚田キヌエ、
なお、第二評者は桜井健司、嵯峨直樹、塚田キヌエ、
なお、第二評者は桜井健司、嵯峨直樹、塚田キヌエ、

それをどう解釈するのかは各参加者の自由であろう。ではないと思う。作品が一旦歌会に提出された以上、ではないと思う。作品が一旦歌会に提出された以上、ではないと思う。作品が一旦歌会に提出された以上ではないと思う。作品が一旦歌会に提出された以上ではないと思う。作品が一旦歌会に提出された以上、不れをどう解釈するのかは各参加者の自由であろう。

最も輝くような解釈が一番良い解釈だと思う。ある。そして私は、作者の意見を含めて、その作品がという行為によって拓かれる多元的で錯綜した空間で作品とは作者の作った物ではなく、各読者の〈読む〉

する。

品を掲載しておく。なお、個別の議論そのものは省略
最後に参加者の解釈が分かれ、活発に議論された作

- **金の鈴の音銀の鈴の音はじまりは小さな音をそっと**
- ・右の目がまだみつからないどうしよう夕暮れのなか
- 中にて人類が立っているよう議事堂が立っているよう雪の人類が立っているよう議事堂が立っているよう雪の
- を流すを流すので生きるといふカメが産卵の夜に涙生涯をただ一匹で生きるといふカメが産卵の夜に涙
- 街いかづちを包んで雲は空に張るくろがね色の川崎の



懇親会のお料理についてご紹介くださる 総料理長・野口秀樹さん。

詠草

- 今朝寒く妻の毛パンを借りて来ぬと語る歌会の男の 伊藤宏見
- 正月には着物を着れるのが嬉しくてひたすら待ちし われの童女期 中村規子
- 石仏いしぶみ玉に加工して人は石にもいのち与える
- 綿貫昭三
- 金の鈴の音銀の鈴の音はじまりは小さな音をそっと 群れなして川上りゆく鯔の稚魚約束の地は何処にあ 朝井恭子
- 遠く近く鳶の声して城ヶ島水仙ロード冬の陽温し 髙橋みずほ

藤田絹子

- 右の目がまだみつからないどうしよう夕暮れのなか あたらしき初春を迎える祝ぐ部屋にまがりて掛かる 塚田キヌエ
- 自衛隊の基地門前に楽奏すヨコスカのデモ月例五百 みんな見てゐる 後藤恵市
- 葉牡丹を植えて祝わむ戊戌歳を夫亡き後の心の忌明 津波古勝子 千田政子
- ・世界から絶賛!ICANノーベル賞被爆国政府が無 視する異常 田之口久司
- 中にて 人類が立っているよう議事堂が立っているよう雪の 吉野裕之
- ・二万人白村江へ兵送り〈二万〉とふ名の町岡山にあ 池谷しげみ

- 祝ひの日贈られしハート型のバルーン日々なえゆき て日常に戻る 半澤敏子
- 桜木も春にそなへむ梢には小さき丸みの朝陽を浴び
- 夕陽さす旗雲金に光りをり二年続きの喪の年暮れて 河北笑子
- 雨戸鎖す手をしばし止む残照にもみぢ明りする師走 の谷戸山 土屋美代子
- 賽銭箱頭上たかあく在るゆえに銭放り上ぐ周防の正
- 生涯をただ一匹で生きるといふカメが産卵の夜に涙 昌子
- を流す 苅谷君代



<、 歌会は、 楽しく。 厳し

- ・雨の降る気配に暗むさむ空を二羽の鴉の声立てずゆ
- 鳩いくは椎の葉群に影おとしかがやきとなる空のま なかの
- 鳥影が今日の啓示のごとく過ぐ高層団地の壁の日溜 堀部知子
- 読み聞かせ楽しみにしてゐるといふ子らばかりでは
- ないといへども
- 渋谷駅の人ごみに消え戻り来ぬ幼馴染の白き横顔
- ・古里の訛りの言葉懐かしき幾年たちても忘れ得ぬま 娘の声の聞えて妻の声はずむ人の来るのは良き事に 岩井幸代
- ・硬きケースのひつたりと身に馴染みをりヴィオラと 思ふあの大きさは ま 三枝むつみ 下田聰子
- ・いかづちを包んで雲は空に張るくろがね色の川崎の 嵯峨直樹
- ・あおぞらを掻くごとく枝を動かして高き鳥呼ぶ冬の
- 終点の駅が始発の駅になる座席を全て逆転させて

真鍋正男

*横浜歌人会ホームページのご案内

催し物の報告など、いろいろな情報を掲載し 横浜歌人会のホームページでは、会の紹介や ています。

URL は次の通りです。ぜひアクセスしてくだ

http://yokohama-kk.art.coocan.jp/

●会員著書紹介 野一色容子第三歌集『自堕落補陀落』(ふらんす堂、二○一七年)



母を最期まで自宅で看取った。

現として誕生。生死を危ぶまれた私だったが、五人の児として誕生。生死を危ぶまれた私だったが、五人の児として誕生。生死を危ぶまれた私だったが、五人の思った。戦後、粗末な医療機器しかない頃に極小未熟

還暦を迎えた時、娘達も曲がりなりにも巣立ち、こ 環暦を迎えた時、娘達も曲がりなりにも巣立ち、こ 湿暦を迎えた時、娘達も曲がりなりにも巣立ち、こ 還暦を迎えた時、娘達も曲がりなりにも巣立ち、こ 還暦を迎えた時、娘達も曲がりなりにも巣立ち、こ に浮かんだ。

注意深く配置した。四季の推移にも配慮した。も一首一首、連と連との関連をパッチワークのようにであり、心情の吐露でもあるが、編年体を心がけつつての歌集は六十代の大半を網羅する。その行動記録

「自選十首」

- りたりわが子 - 大ぶりのGUCCIが似合ふいつぱしの働く女とな
- 水難の大川小の校庭は半旗の高さに鯉のぼり垂る
- らしのにほひ 桃の香のほのかほのかは生まれ来しちさき者との暮
- びだす

 外界は睫毛が要ると月満ちて生れし子どもの睫毛伸
- の子は
 の子は
 最が丸。結べば紐の不思議さよひとりあそびす人間
- の束を丸ひと日読みて捨てにき青春のしつぽでありし手紙
- 梨色のマンゴー色の柿色の月に祈りし恋のことなど
- りのごとく
 片陰るゆふべの部屋にもどり来て野の花を挿すあか
- ぬままに薄紅の夕映えながら我がものぞ暮れゆくままに点さ
- **よぶ** 冬ざれの仁王門あり簡浄のひかりは仁王の腹部にお

*「横浜歌人会会報」第一〇〇号のご紹介

一冊です。
一冊です。
A 4 判4ページの充実したられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお話をられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお話を

stす。 http://yokohama-kk.art.coocan.jp/ 会報はホームページからダウンロードができ

[主な内容]

特集:インタビュー

谷に根ざして***。岡部桂一郎さん:動かざる樹の沈黙―戸塚の

よ、ひらけ」とうたいつつ 草柳繁一さん:一冊の歌集を携えて―「胡麻

千々和久幸/塩野崎宏/角宮悦子横浜歌人会会報一○○号を迎えて



一会員作品

際のドアに人消ゆ エンジェルパス受けてゴールを決むるがに発車間

気分 目鼻口あくシート状パックして今宵は仮面舞踏会

雪富士の雲のスヌード暖かさうわれのシホンのス

カーフよりも 子の出で立ち

●柴原明美

の由来 田作りに煮干し選りつつテレビ見る日本列島成立

感情のはけ口なりしや壁の穴そのままにして納戸 にするらし

袴にブーツのハイカラサンは古びずに卒業式の女

●井澤幸恵

歌人ありき生成りの麻のハンカチの折り目清しき

岡部桂一郎

つぶやきを聞いていただきありがたい問わず語り

の声も小さき

思い出のつきざる今も窓の外にあんずの花のひら

いて散って

●津金規雄

冬枯れの苑の坂ゆくミニバスに身はあづけたり黝

き海見ゆ

号外は本文までも大活字羽生結弦の連覇を報ず

いくつかの読点ありし半生に句点を打つか よ、きつかり 打て

●中込力ヨ子

ランツ

歌心折りたる夫の育ているガラスの鉢のエアープ

リュックに詰めて

無菌室にわれのパジャマを届けくる夫は登山用

れもあり

耳しいのこけしに心打ちあけて祈るほかなき夕暮

●長野道子

新春の注連縄飾る能舞台酒の過ぎたる猩猩の舞ふ

手に受けし瞬時に消ゆる六花には校章想ひ友ら現

る

ミュシャ描く伏し目がちなる目差しは奈良のみ寺

の仏像のごと

●小南紀子

生き物の気配なき街に除雪車の音のみ聞こゆ 吹

積もりたる雪の起伏は青き空閉ぢ込むるらし透き

雪く真昼間

て輝く

雪深き温泉の池に泳ぎゐる錦鯉らは泰然として

●川井怜子

行き交へる人を眺めて週末の元町スタバのキャラ

メルマキアート

人の輪の視線の先にボルゾイ犬ロシアン・ウルフ ハウンドあな触れがたく

ボルゾイ犬曳くポロキャップの男よりたたずむ犬

の踵すがしき

●鶴見典子

リと駅にての諍ひ多き日本とピアノ置かるる優しきパ

の風に明日は雨ブロッコリーの青の珠たまゆら動く台地

十年後傍らに君の声のして私は何を書きてゐるら

●尾崎知子

広島の路面電車のステップは膝までありぬ

四十二年ぶり

こざと偏の書き順ちがふと男子いふ同窓会に「隅

井」と書けば

高校時代に妹背の滝へサイクリング六人のうち女

子のみ覚ゆ

●佐波洋子

ろす。
をきたるふゆの空にて鉄塔は硬き地盤に墓を見下

柿の木は退屈そうに薄雲を捉えんと四方に枝を伸

ばせり

口角をあげて大きな月赤く何をか笑う 笑われて

いる

「黄木会」のこと

熊沢正

年一月六日、会則等の審議を中心とした懇談会 ちがないところから、これに代わる作歌上の勉強を中心とした会を作ろうとする動きが前々からあつたが、勉強中心の建前として会員数は大体三十名以内、年齢は三、四十代として考えることとし、杉本三木雄(創生)、福田二三男(国民文学)、藤曲豊(樹木)、宮田信次(花実)、吉田宗一郎(同)及び私(アララギ)が発起人となつて呼びかけを行なつた。この結果に基づく懇談会を花実会員の岩崎一平氏(初代相撲協会診療所長)宅で昭和三十一年十二月五日に開き、参会者全員の賛成を得た。次いで翌三十二き、参会者全員の賛成を得た。次いで翌三十二き、参会者全員の賛成を得た。次いで翌三十二

市の職員寮を中心として毎月開催した。(略)第一回の研究会は同年二月二日県職員会館でより会場は主として県の職員会館、及び議員開き十四名が参加し、雨宮熊太郎氏が記念写真開き一回の研究会は同年二月二日県職員会館で

今回、横浜歌人会の発足に当たり(註・昭和4年4月)、この黄木会はその先駆的役割をなしたと相互が築いた信頼感は、その殆どが横浜歌人会に参加している事実から、必ず本会にも役立つに参加している事実から、必ず本会にも役立つとと信じてやまない。

※「横浜歌人会々報」No.1 より

編集後記

- た。詠草参加は37名でした。桜木町ワシントンホテル店にて開催されまし桜木町ワシントンホテル店にて開催されまし
- 参加は30名でした。 例の馬車道十番館にて開催されました。詠草例の馬車道十番館にて開催されました。詠草
- てご参加ください。 に実施する「金沢自然動物園散策」です。奮っ 本年の文学散歩・即詠歌会は平成30年5月20日
- りください。会報に掲載させて頂きます。と説明文(23字×28行)を左記後藤あてお送会員の皆様で、歌集を上梓さた方は、自選10首
- お申し出下さい。 (K・G) 海への登載を希望されない方は、編集人まで 本会報に併せて新年度の名簿を配付します。名

横浜歌人会会報 第一一八号

発行日 二〇一八年四月三十日

編集人 後藤 恵市

発行人 吉野 裕之

発行所 横浜歌人会

振替口座 00230-0-52137(名義 横浜歌人会)

制作 アトリエ云 / 印刷 啓文社

の内容が印刷版のものとは異なります。このファイルはホームページ配布版のため、奥付

